



## 出生時および3歳児のBMIとその後の肥満リスクとの 関連

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本DOHaD研究会 公開日: 2018-03-09 キーワード: 作成者: 伊藤, 早苗, 富松, 理恵子, 上西, 一弘, 小林, 正子, 石田, 裕美, 福岡, 秀興 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10271/3269">http://hdl.handle.net/10271/3269</a>

出生時および3歳時のBMIとその後の肥満リスクとの関連

○伊藤早苗<sup>1)</sup>、富松理恵子<sup>1)</sup>、上西一弘<sup>2)</sup>、小林正子<sup>3)</sup>、石田裕美<sup>1)</sup>、  
福岡秀興<sup>4)</sup>

女子栄養大学 給食・栄養管理研究室<sup>1)</sup> 女子栄養大学 栄養生理学研究  
室<sup>2)</sup> 女子栄養大学 発育健康学研究室<sup>3)</sup> 早稲田大学 ナノライフ創新  
研究機構<sup>4)</sup>

【目的】我が国では出生体重が減少している。小さく生まれ、かつ出生後の急激な体重増加により、肥満や将来の生活習慣病のリスクが高くなるという報告がある。本研究では、出生時および3歳時の体格と、その後の発育および思春期における体脂肪率との関係を縦断的に検討した。

【方法】発表者らは、都内の私立中高一貫校において、毎年4月に身長、体重、体脂肪率の測定を行っている。本研究の対象者は、2000～2005年に入学した1439名である。対象者の保護者には、2005年に出生時および5歳までの身長、体重について問うアンケート調査を実施した。また、2003～2005年入学生については、小学生時の身長、体重を健康診断票より転記した。出生時および3歳時の身長、体重のデータが揃い、出生35週未満の2名および双生児として出生した1名を除く750名を解析対象者とした。男女別に、出生時と3歳時のBMIを各々3分位にて群分けし、さらにその組み合わせにより9群に分類した。このうち、本研究では、①出生時BMI3分位未満・3歳時BMI3分位以上群、②出生時BMI3分位未満・3歳時BMI3分位未満群、③出生時BMI3分位以上・3歳時BMI3分位未満群、④出生時BMI3分位以上・3歳時BMI3分位以上群の4群について、その後の身長、体重、BMIおよび体脂肪率の違いを検討した。

【結果】男女ともに全ての年齢で、群による身長の違いはなかった。男女ともに体重、BMI、体脂肪率は、群による有意な差がみられた。特に女子において、小さく生まれて3歳時に大きかった①群は、思春期初来時期からBMIの増加傾向が顕著となり、高校1年および3年時の体脂肪率が他の全ての群より有意に高値であった。

【結論】女子において、「小さく生まれて大きく育つ」ことは、思春期における肥満のリスクを高めることが示唆された。